幼な子に学ぶ

教育学研究科学生　石橋尚子

幼い子ども達を見ていると，実にたくさんの事を教えられる。その中でも特に印象深く思い出されるのは，子ども達の飽きることを知らない探求心である。

噴水の水で遊んでいた4歳児。手にしていた水鉄砲の片端で，噴水の水の出口をふさいでみた。じっと見つめる子ども達。水鉄砲の先から水が出ると大喜び。さらに一段水鉄砲を重ねて，水の出方を確かめる。三段まで重ねて水の出方を確認すると「お母さんのおっぱいみたい」とちょっと飲んでみる。「おいしい！」子ども達はいつもとはひと味違う水の味を楽しんでいた。

園庭の小川にプリンの容器を持ち込んで遊んでいた5歳の男の子。何度も何度も水をくんでは上から落としてみる。さらにもう1つプリンの容器を持ってきて，左右から水をはさむようにしてすくい上げる。水は様々な様相を見せる。近くにあったざるでもやってみる。ざるでは水はすくえないが，波が起こる。波はずっと伝わっていく。波に興味を持った男の子は，いろいろな素材を持ち込んで波を作り始めた。そして，左右の手で同時に波を起こすと波は右と左に分かれて伝わっていくことを発見した時，男の子の顔がぱっと輝いた。それからは，もう夢中になって水の不思議，波の不思議を探り始めた。

このような楽しみは，何も子どもに限ったことではないかもしれない。野球やゴルフの練習に打ち込む人の熱心さから，学問的探求心まで，大人の中にも見られないことはない。

しかし，幼児のような情熱は，まだ本当に残されているだろうか。特に，学ぶ楽しみは，年齢とともに減少しているような気がしてならない。幼児期には母国語を何の苦労もなく学習できたはずなのに，今は何一つ身につけるのにも苦労している私である。受験戦争という言葉さえ耳慣れてしまった昨今。受験勉強の波に翻ろうされているうちに，幼児のころに味わった学ぶ楽しみをどこかへ忘れて来てしまったのだろうか。知りたい，やってみたい，できるようになりたい。そんな好奇心をいつの間にか摩耗させてしまったのだろうか。

幼児のころの心を大切に。やらされる勉強はもうやめにしたいものである。「はてな？」「おやおや」「なぜだろう」「こうかもしれないぞ」「こうしてみたらどうだろう」「なるほど」「でも，いつでも，どこでもそうだろうか」というような疑問や探求心を，もう一度育てていきたい。好奇心に胸を膨らませ，昨日よりちょっとずつ違う何かを見つけていきたいものである。

最後になりましたが，ようこそ広島大学へ。ともに学べることを心からうれしく思っています。

水が出るかな？
（写真提供：広島大学附属幼稚園）